

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和元年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第5号（8月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

令和元年度病虫害発生予報 第5号

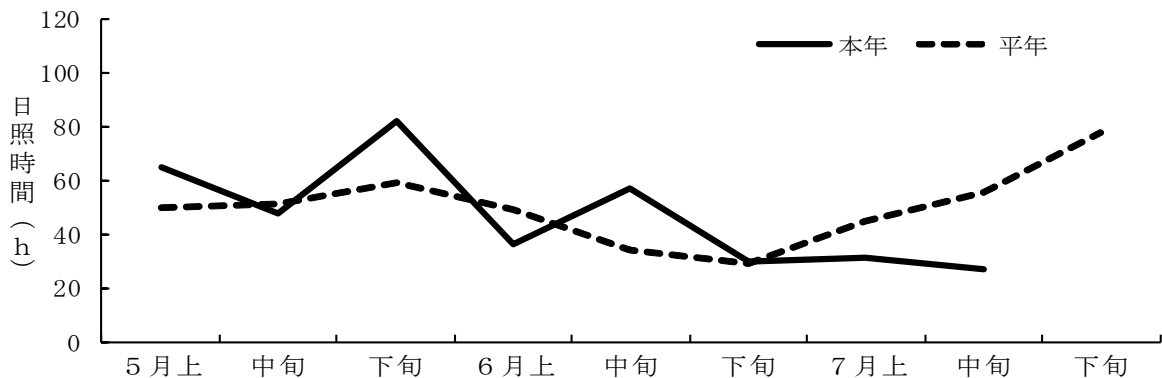
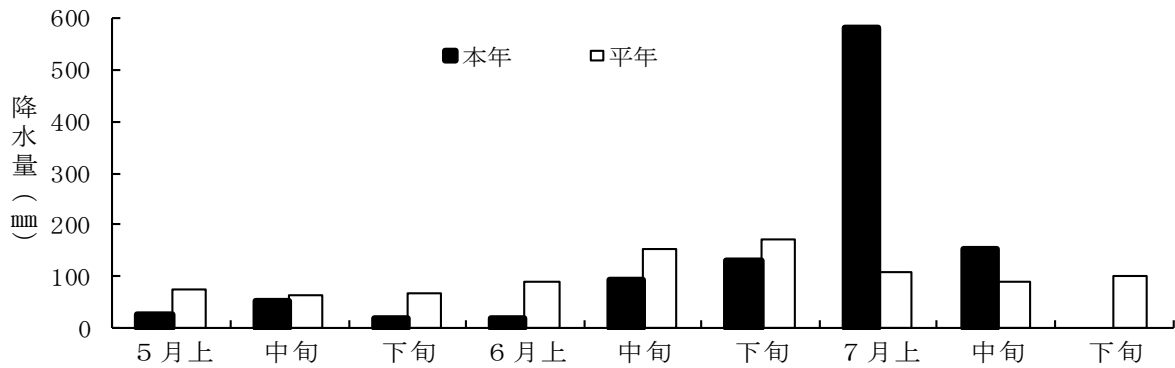
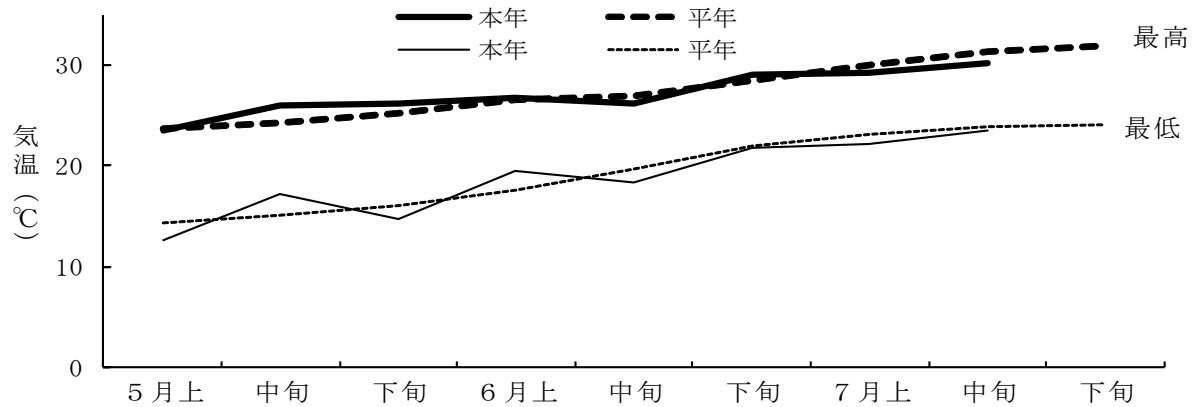
令和元年7月29日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（7月27日から8月26日） 令和元年7月25日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	30	40	九州南部では、気温は平年並みで、降水量は平年並みか少なく、日照時間は多い見込み。奄美地方では、気温、降水量、日照時間ともに平年並みの見込み。
	奄美地方	40	30	30	
降水量	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	30	40	30	
日照時間	九州南部	20	30	50	
	奄美地方	30	40	30	

II. 5～7月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	普通期水稻	葉いもち	並	並
		穂いもち	—	並
		紋枯病	並	並
		トビイロウンカ	並	やや多
		コブノメイガ	やや少	並
	サツマイモ	ナカジロシタバ	並	並
野菜	イチゴ（苗床）	炭疽病	並	並
		ハダニ類	やや少	並
	サトイモ	疫病	並	並
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	やや多	やや多
		アザミウマ類（県本土，施設）	多	多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		黒点病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
	果樹カメムシ類	ツヤアオカメムシ	少	少
		チャバネアオカメムシ	少	やや少
ナシ	ハダニ類	多	多	
茶樹	チャ	炭疽病	やや少	並
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	やや少	やや少
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	少	やや少
		チャハマキ	やや少	並
		チャノホソガ	やや少	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多
		チャノキイロアザミウマ	少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稲

(1) いもち病

ア 予報内容

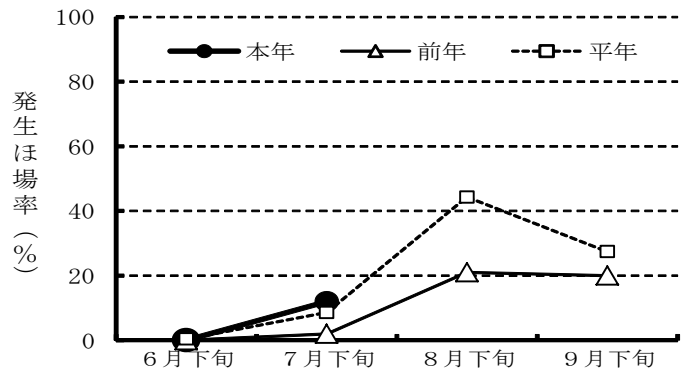
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 葉いもち：並
穂いもち：並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率12%（平年9%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 上位葉への発生が認められる場合は、粉剤または液剤で早急に防除を行う。
- (イ) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。
- (ウ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。常発地や葉色が濃いほ場では、穂肥の施用は控える。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

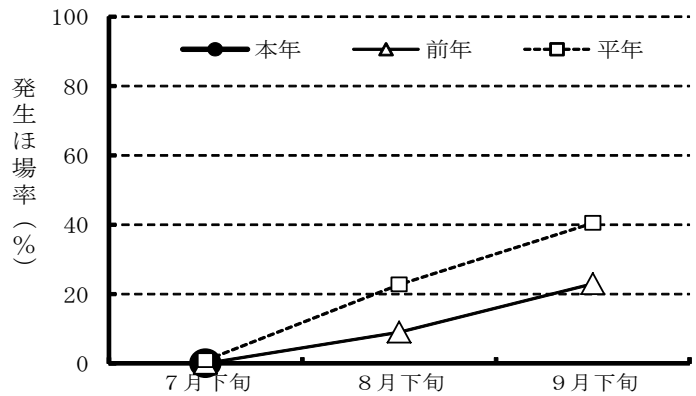
- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0%（平年1%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 早生種では出穂前1週間～出穂期、中晩生種では出穂前1～2週間の防除に重点を置く。
- (イ) 窒素質肥料の多施用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。
- (ウ) 紋枯病が発生している水田では、出穂後も病斑の進展に注意する。



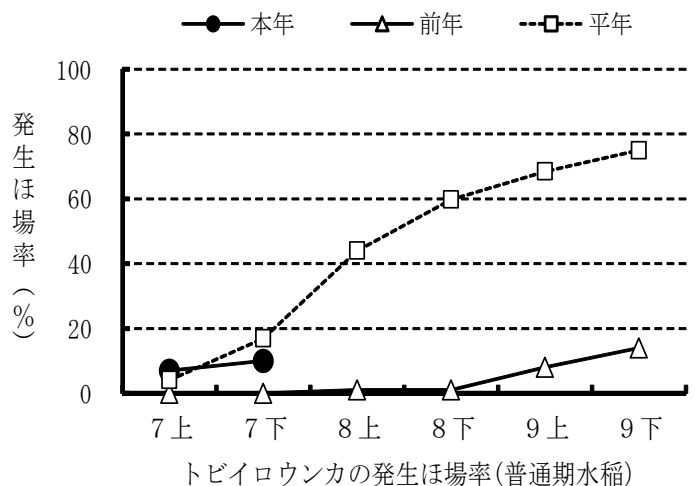
(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率10%（平年17%）：並
60W水田予察灯での5～7月の誘殺虫数93頭（平年43頭）
：やや多（+）



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) トビイロウンカの発生経過予測図は6ページのとおりであるが、今年の特イロウンカは飛来量がやや多く、起算日を7月1日、4日及び15日として発生経過を予測した(次ページの表1参照)。

7月1日及び4日飛来虫由来第1世代成虫の羽化時期は、7月31日～8月2日頃と予測されるので、8月上旬の短翅型雌成虫の発生に十分注意し、100株調査して20頭以上の発生を認められた場合は、第2世代の防除適期(8月下旬頃)に防除する。

(イ) トビイロウンカは増殖率が非常に高く、8月下旬以降には高密度となり坪枯れ被害を生じる恐れがあるので、今後の発生動向には注意が必要である。

なお、ほ場内の分布にはムラがあるので、ほ場全体の発生状況を確認する。

(ウ) 稲の株元に生息するので、粉剤や液剤で防除する場合は、薬剤が株元に十分届くように散布する。

(エ) 特に飼料用稲や育苗箱施用剤を使用していないほ場、又は、育苗箱施用剤を使用しているほ場でも、ウンカ類に効果が高いトリフルメゾピリム剤を使用していない場合は、今後、トビイロウンカの密度が高まる可能性が高いので、十分注意する。

(4) コブノメイガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

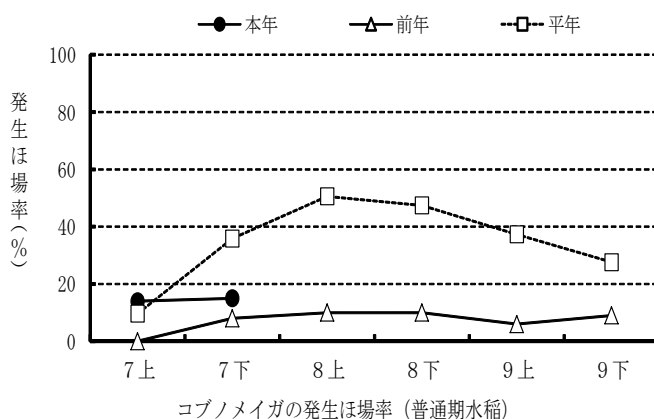
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率15% (平年36%)

：やや低い (-)

フェロモントラップでの5～7月

の誘殺虫数が218頭とやや多い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生経過予測のための起算日を7月6日と7月17日(次ページの表1参照)として予測したときの第1世代虫の発蛾最盛日は、8月6日頃と8月17日頃と予測される(6ページの発生経過予測図参照)。

コブノメイガの防除適期は発蛾最盛日の7～10日後(幼虫ふ化揃い期)で、薬剤散布は粉剤または液剤の場合は発蛾最盛日の7～10日後、粒剤の場合は発蛾最盛日頃に行う。

特に早植ほ場で本種による被害が多い傾向にあるが、今年は飛来量がやや多いので、コブノメイガに効果の高い育苗箱施用剤を使用していない場合は、今後、コブノメイガの被害が増える可能性が高いので、十分注意する。

(イ) 止葉を含む上位3葉への被害は収量・品質に影響するので、飛来第1世代の蛾の発生が多い場合は第2世代幼虫を対象とした8月の防除を行う。

(表1) 予察灯などにおけるウンカ類及びコブノメイガの誘殺状況

農業開発総合センター内 (南さつま市金峰町, 2019年)

注: -は欠測。

日付	60W予察灯(水田)						ジョンソントラップ ^o			フェロモン	100W水銀灯(畑)			
	南さつま市			さつま町			南さつま市			南さつま市	南さつま市			
	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメビ ウンカ	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメビ ウンカ	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメビ ウンカ	コブノ メイガ ^o	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメビ ウンカ	コブノ メイガ ^o
2019/6/1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
6/5	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	8	0	0	0
6/6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	0	0	0	0
6/8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	0	0	0	1
6/9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	1	0	0	1
6/10	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0
6/13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0
6/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0
6/17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
6/20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/27	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	9	0	0
6/28	5	1	0	0	0	0	3	0	0	0	2	0	0	0
6/29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/30	0	0	0	0	0	0	12	3	0	0	0	1	0	0
6月計	9	1	0	1	0	0	16	3	0	104	21	10	0	2
7/1	195	22	0	336	4	0	17	5	1	0	969	207	41	0
7/2	103	7	0	0	0	0	5	0	0	0	186	2	20	0
7/3	18	2	0	38	1	0	0	5	1	2	5	15	1	0
7/4	42	46	1	0	0	0	0	2	0	4	19	143	1	0
7/5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3	5	6	1	0
7/6	4	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	1	0	1
7/7	3	2	0	0	0	0	1	1	0	3	4	0	0	0
7/8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	1
7/9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
7/10	0	0	0	3	2	0	0	1	0	3				
7/11	1	0	0	0	0	0	1	1	0	11				
7/12	5	0	0	0	0	0	1	0	0	6				
7/13	0	0	0	30	23	0	1	23	1	2				
7/14	0	0	0	0	0	0	0	11	0	6				
7/15	10	10	0	0	0	0	0	1	0	13				
7/16	4	1	1	4	1	0	0	0	1	5				
7/17	0	0	0	2	0	0	0	0	0	16				
7/18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4				
7/19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
7/20	0	0	0	6	1	0	3	0	2	2				
7/21	28	1	0	0	0	0	1	0	0	12				
7/22	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
7/23	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2				
7/24										5				
7/25														
7/26														
7/27														
7/28														
7/29														
7/30														
7/31														
7月計	423	92	2	419	32	0	30	50	6	112	1,189	374	68	2
6~7月計	432	93	2	420	32	0	46	53	6	216	1,210	384	68	4

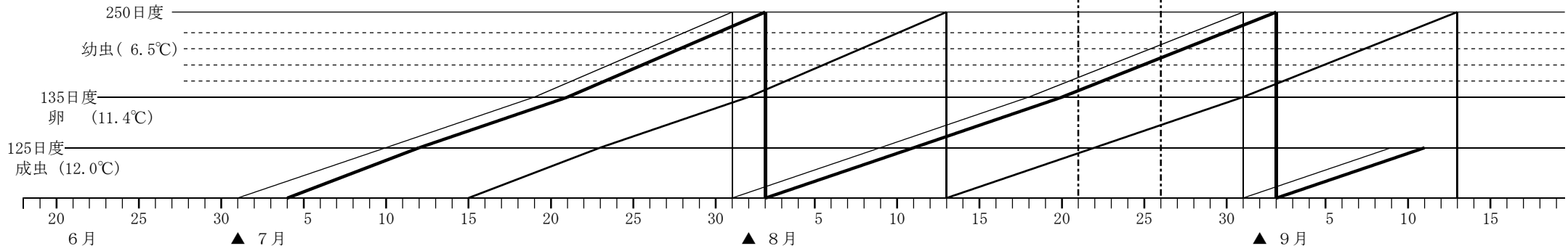
(別紙)

トビイロウンカ・コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測図 (アメダスポイント: 加世田のデータを使用)

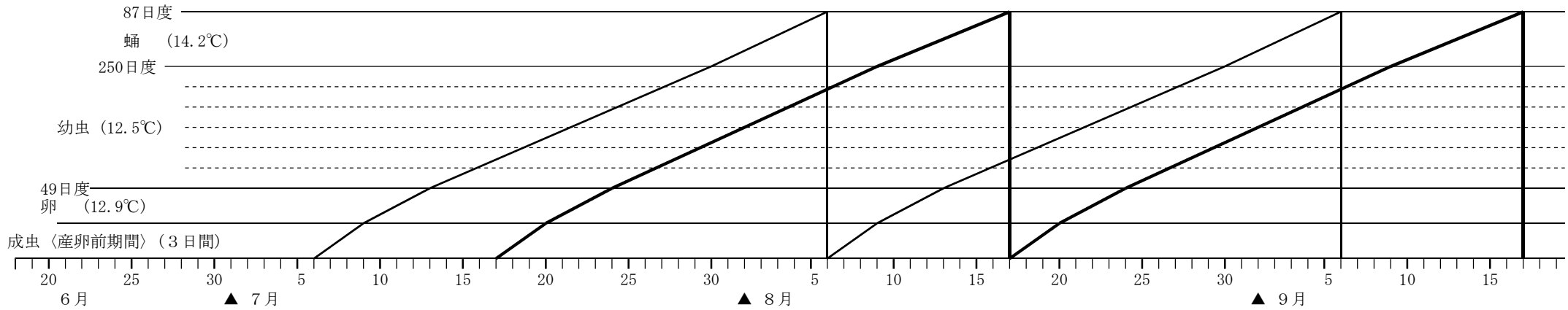
2019年7月22日 作成

鹿児島県病害虫防除所

1. トビイロウンカ



2. コブノメイガ



2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率33%（平年39%）：並
糖蜜トラップでの誘殺虫数（7月上中旬 21頭（7月上中旬の平年 175頭））：やや少（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。
- (イ) 薬剤散布後も幼虫の発生量が多い場合は、2～3週間後に追加防除を行う。
- (ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、防除時期を逸しないよう注意する。

ナカジロシタバ誘殺状況（農業開発総合センター大隅支場 糖蜜トラップ）

月旬	本年	平年	H30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
7上	5	91	27	0	191	455	3	90	69	73	1	3
7中	16	84	27	7	222	312	10	56	85	37	73	10
7下		98	305	83	337	67	18	14	29	105	21	3
7計	(21)	273	359	90	750	834	31	160	183	215	95	16

注) ()内の数値は7月上中旬の合計，平年はH21～30の平均値。

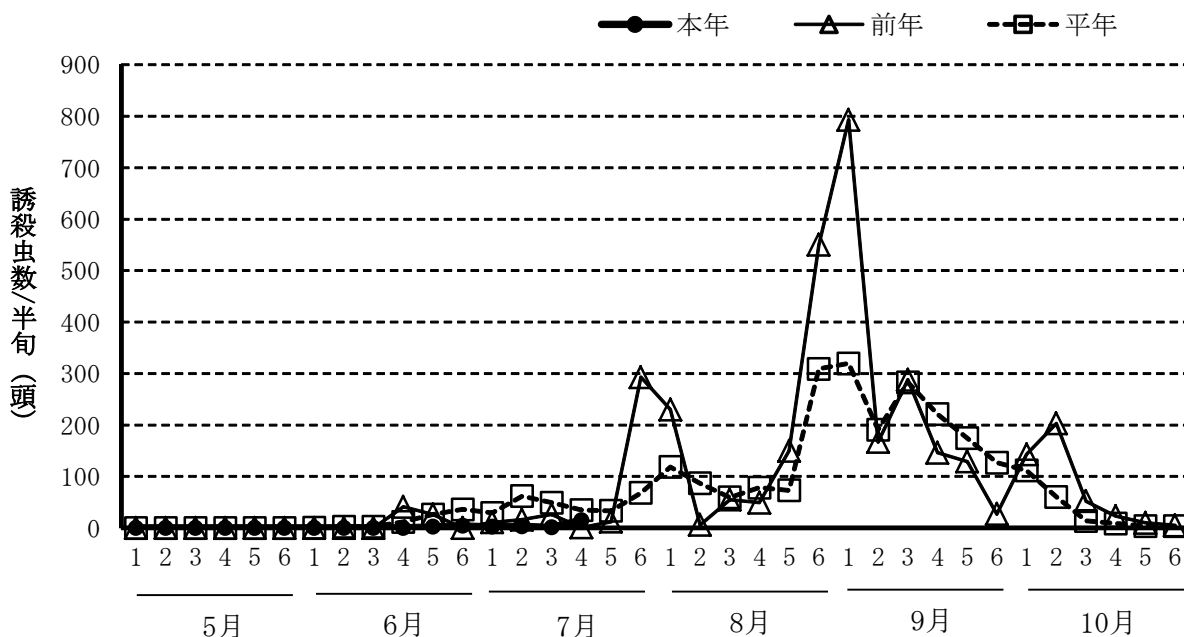


図1 糖蜜トラップでのナカジロシタバの誘殺状況
調査場所：農業開発総合センター大隅支場（鹿屋市 串良町 細山田）
注) 調査データは半月毎に集計した。

Ⅱ. 野菜

1. イチゴ（苗床）

(1) 炭疽病

ア 予報内容

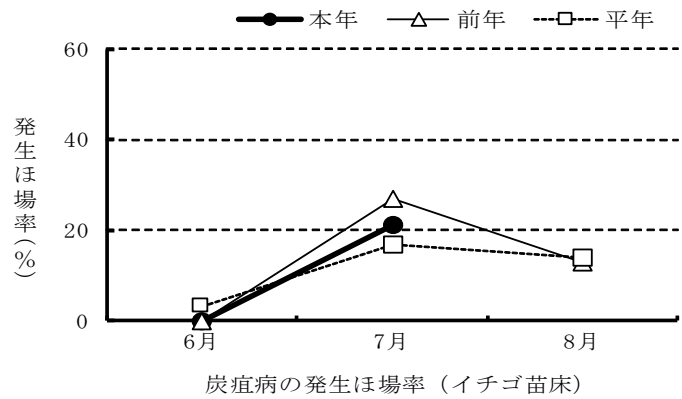
(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率21%（平年17%）：並



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

(イ) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。

(ウ) 生育不良の親株や萎凋した苗は、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

(エ) 薬剤による予防散布は10～14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(オ) 地床育苗では、ビニールマルチ等で降雨等による土のはね返りを防止する。

(カ) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。

(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

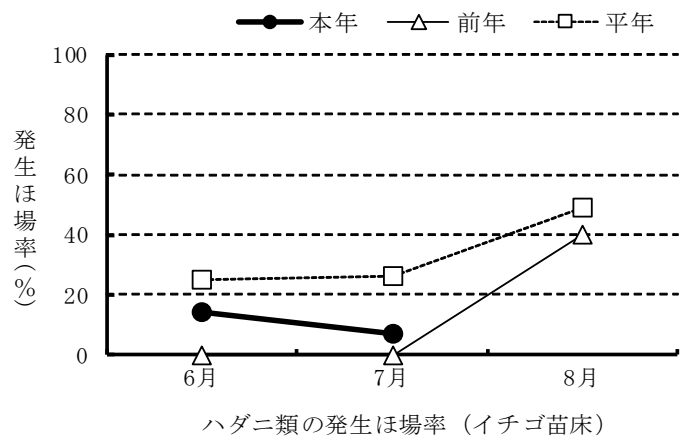
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率7%（平年27%）

：やや低い（-）

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない（+）



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

防除に関する今月の留意事項

1. イチゴのチバクロバネキノコバエ（チビクロバネキノコバエ）

平成30年12月に本県で初めてイチゴでチバクロバネキノコバエの被害が確認されました（平成30年度病害虫発生予察特殊報第6号参照）。栽培期間中の防除は困難なことから、本ぼへの侵入を防ぐために、以下の防除対策を徹底する。

(1) 未熟な堆肥を施用すると成虫を誘引し産卵を促すので、完熟堆肥を施用する。また、有機物を含む基肥を施用する場合には十分に土壌混和する。

(2) ほ場周辺部に古株などの植物残渣、野積みの堆肥がある場合には、発生源になりやすいため、周辺の衛生に留意する。

2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
(イ) 発生量 並

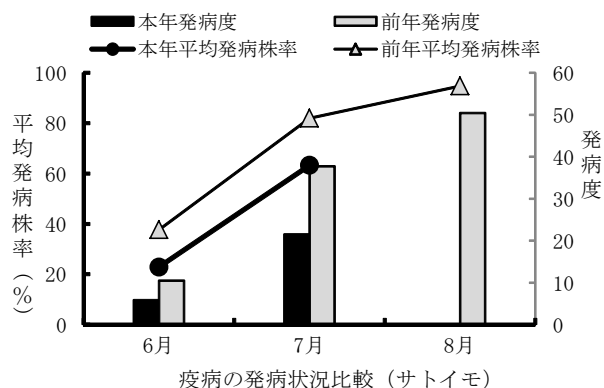
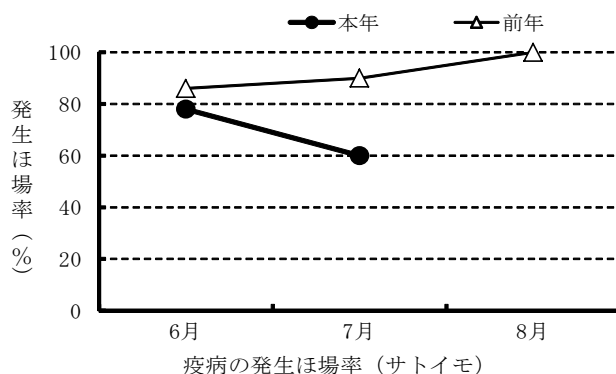
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率60% (前年90%)
平均発病株率63.3% (82.0%)
平均発病度21.5 (前年37.8)

：中発生

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 前年発生したほ場では発病する可能性が高いので、注意する。
(イ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、薬剤散布は予防防除を主体とする。
(ウ) 未発生ほ場では発生の有無をこまめに観察し、発生を確認したら直ちにアミスター20フロアブルを7日間隔で2回散布する。
(エ) 高温時の薬剤散布や、雨の合間においても散布後の急激な日照は、薬害の発生を助長する恐れがあるので、ジーファイン水和剤等を使用する場合、薬剤防除時の気象動向に注意する。
(オ) 薬剤散布後、葉が長時間濡れた状態に置かれると薬害の発生を助長する恐れがあるので、散布は葉が速やかに乾く時間帯を選ぶ。
(カ) 発病茎葉は発生源となるので、早めに摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。
(キ) 排水の悪いほ場では多発しやすいので、長時間の滞水を避けるよう、対策を十分に行う。



Ⅲ. 花き (キク)

(1) ハダニ類

ア 予報内容

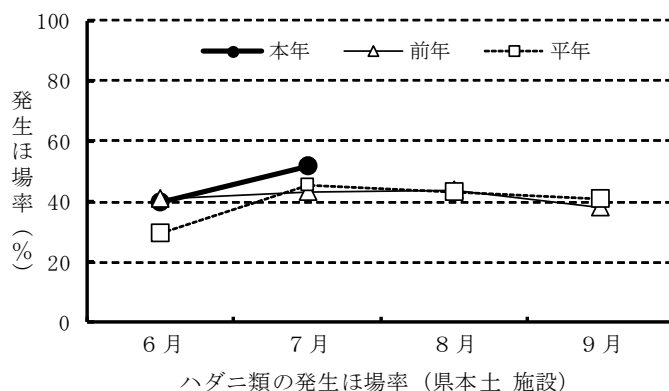
- (ア) 発生地域 県本土(施設)
(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率52% (平年46%)
：やや高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。
(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。
(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。
(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率43%（平年23%）

：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介する。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

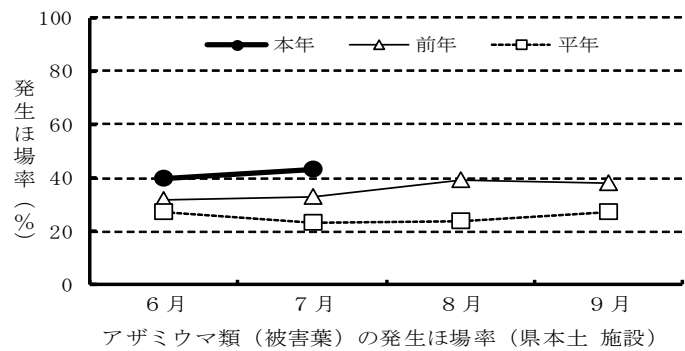
(ウ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

(エ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。

(オ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊本地域(果実) 並

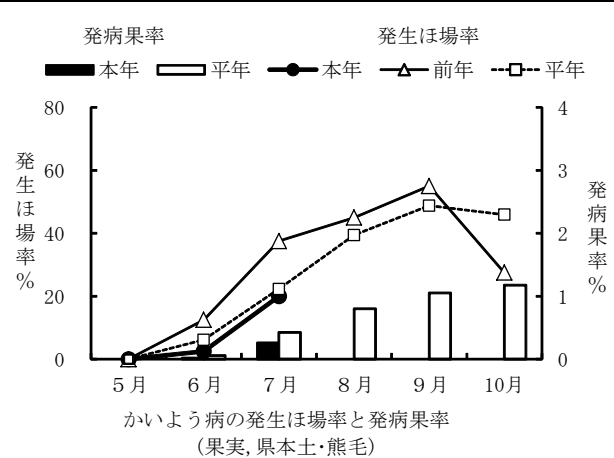
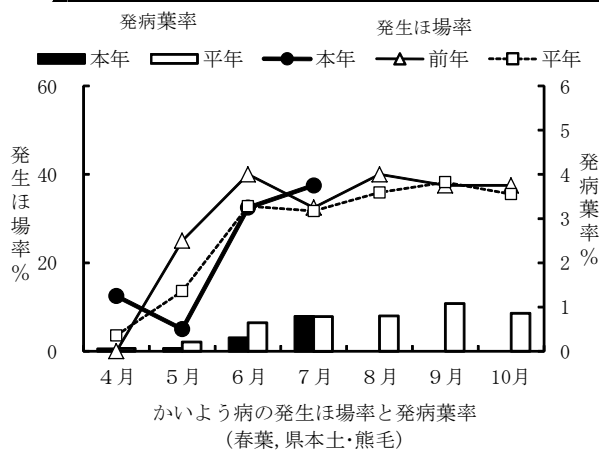
奄美地域(果実) やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊本地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや多	並
発生ほ場率	38%（平年 32%）：やや高い（+）	20%（平年 22%）：並
発病率	0.8%（平年0.8%）：並	0.3%（平年0.4%）：並



(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない（-）

<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 24%) : やや低い (-)	0% (平年 14%) : やや低い (-)
発病率	0% (平年0.4%) : やや低い (-)	0% (平年0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。
- (イ) 台風の影響により発生が多くなることが予想されるので、台風前の防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : やや少

発生ほ場率 15% (平年 26%)
: やや低い (-)

発病率 0.6% (平年1.6%)
: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 0% (平年 3%) : 並

発病率 0% (平年0.0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 薬剤の残効は降水量と散布後日数の影響を受ける。このため、次回の散布は累積降水量250～300mmに達する時期を目安に行う。ただし、累積降水量がこれより少なくても1か月程度経過したら次の散布を行う。
- (イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 やや多

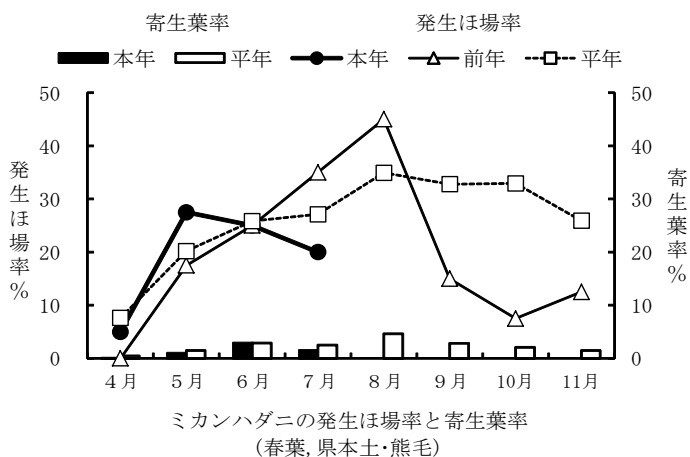
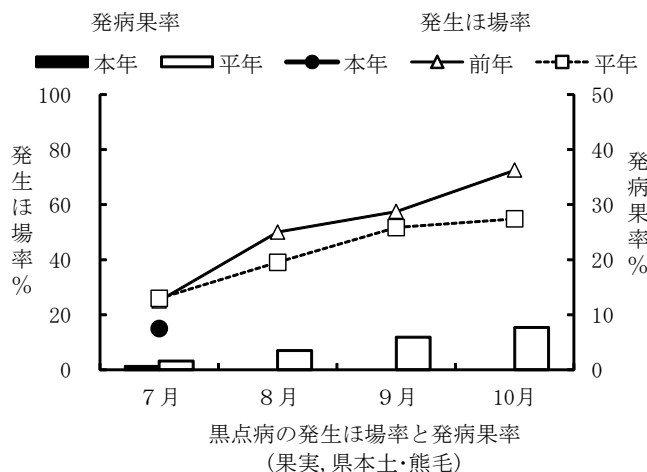
イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : やや少

発生ほ場率 20% (平年 27%)
: やや低い (-)

寄生葉率 1.5% (平年2.5%) : 並



(イ) 気象予報

降水量： 平年並みか少ない (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量： やや多

発生ほ場率 14% (平年 4%) : 高い (+)

寄生葉率 0.01% (平年 0.4%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年 1 回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。

(4) 果樹カメムシ類 (ツヤアオカメムシ, チャバネアオカメムシ)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 ツヤアオカメムシ 少
チャバネアオカメムシ やや少

(ウ) 飛来時期 遅い

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

予察灯の誘殺虫数, 7月第1~4半旬の合計 (単位: 頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ			チャバネアオカメムシ		
	本年 (R1)	前年 (H30)	平年	本年 (R1)	前年 (H30)	平年
南さつま市加世田唐仁原	9	103	100	6	32	168
いちき串木野市湊町	14	121	73	5	317	113
出水市美原町	14	1,316	565	6	6,099	1,262
鹿屋市串良町	4	116	47	0	7	29
誘殺虫数	少 (-)			少 (-)		

注1) 平年は、鹿屋市串良町が過去10年間、他は8か年の平均。

予察灯の光源は、鹿屋市串良町は捕虫灯20W、他は捕虫灯40W。

寄主植物 (スギ・ヒノキ) の球果量が、平年より多い地域がある (+)

注2) 令和元年度病害虫発生予察情報 発生予報第4号 (7月) 参照

平年より球果量指数が平年より高い地域: ヒノキ (南薩・北薩*・始良*), スギ (南薩・北薩・始良・大隅*)

*は球果量指数が平年値より15以上高い地域

ヒノキ球果の寄生虫数 (7月後期) (単位: 頭/5枝)

成虫・幼虫	ツヤアオカメムシ			チャバネアオカメムシ		
	本年 (R1)	前年 (H30)	平年	本年 (R1)	前年 (H30)	平年
成虫	0.00	0.13	0.06	0.48	1.30	0.72
幼虫	0.00	0.07	0.12	0.24	0.63	0.41
寄生虫数	少 (-)			やや少 (-)		

注3) 餌植物であるヒノキの球果の寄生虫数を調査。

調査は、7月後期 (7/19~22) に5地点で実施。

調査数は本年から変更し、1地点当たり5ヶ所 (昨年まで10ヶ所) の調査ポイントを設定し、1ヶ所あたり5枝の合計25枝 (昨年まで50枝) でおこなった。また、表の単位を頭/5枝に変更した。

ヒノキ球果の吸汁痕数 (口針鞘数) の推移 (単位: 本/果)

調査年	7月		8月		9月		飛来時期
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
本年	—	0.5					遅い
前年	0.9	10.5	17.8	21.7	27.3	27.4	早い
平年	0.2	2.7	6.5	11.5	16.2	20.3	並

注4) ヒノキの球果の加害が進むと口針鞘数が増加し、餌として適さなくなると餌植物から離脱する。

ヒノキ球果の採取は、7月後期 (7/19~22) に5地点で実施。

7月後の口針鞘数は、いちき串木野市:1.20、さつま町:0.05、阿久根市:0.45、出水市:0.85、霧島市:0.00。

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 果樹カメムシ類の飛来は地域間差、ほ場間差があるため、こまめに園内外をよく見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。
- (イ) 寄主植物の着果量が多い地域では、今後新生虫の発生が増加する可能性があるので注意する。

2. ナシ

(1) ハダニ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

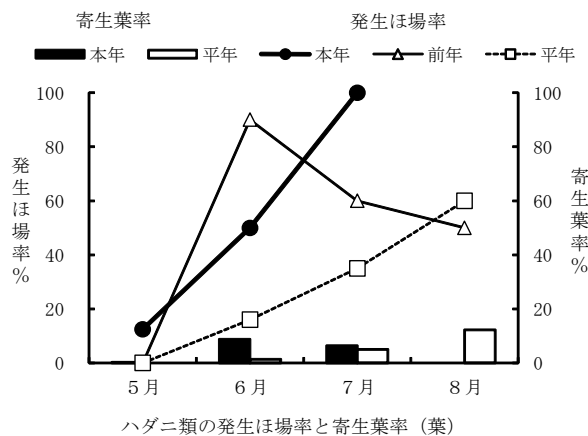
- (ア) 調査結果(葉) 発生量：多
発生ほ場率100% (平年 35%)：高い (+)
寄生葉率6.4% (平年5.0%)：並

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 夏季の薬剤による防除は発生初期に行い、葉裏や徒長枝にもかかるよう十分量散布する。
- (イ) 抵抗性の発達を防ぐために、同一薬剤、同一系統の薬剤の使用は年1回とする。



V. 茶 樹

(1) 炭疽病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率46% (平年53%)
：やや低い (-)

1 m²当たり病葉数5.6枚 (平年6.5枚)
：並

定点無慣行防除園での病葉数 (7月中旬) 66枚/m² (平年46.3枚)：やや多 (+)

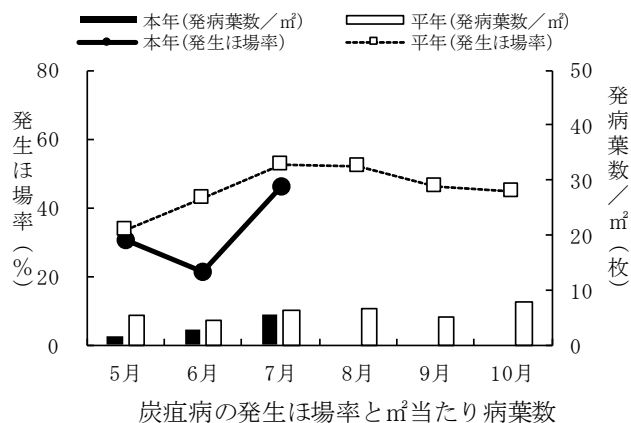
7月上旬に激しい降雨があった 降水量 (7/1~10, 加世田) 581.5mm (平年109.1mm) (+)

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生源となる病葉が少なくても、秋芽生育期に降雨が続くと発生しやすいので注意する。
- (イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防効果のある薬剤で、3葉期に治療効果の高い薬剤で防除する。



(2) 新梢枯死症 (輪斑病菌による)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少
- (ウ) 感染時期 秋芽生育前期 (8月)
- (エ) 発生時期 秋芽生育後期

イ 予報の根拠

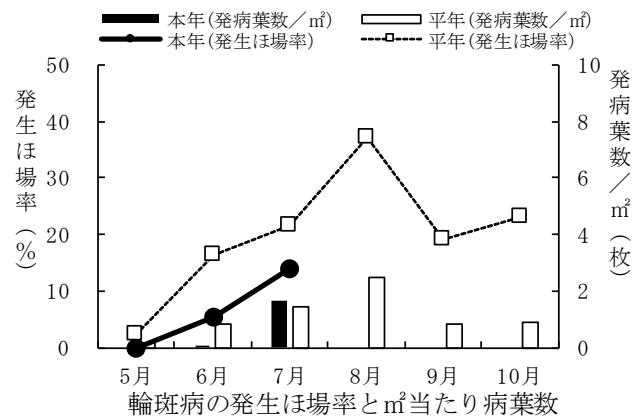
- (ア) 調査結果 発生量(輪斑病) : やや少
発生ほ場率(輪斑病) 14% (平年22%)
: やや低い (-)

1 m²当たりの病葉数(輪斑病) 1.7枚 (平年1.4枚) : 並

定点無防除園での輪斑病の病葉数(7月中旬) 9枚/m² (平年10.4枚) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く、秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発するので注意する。
- (イ) 炭疽病との同時防除が可能である。



(3) 網もち病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少
- (ウ) 感染時期 秋芽生育期 (8月)
- (エ) 発生時期 10月

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量 : やや少
発生ほ場率 0% (平年2%) : やや低い (-)
1 m²当たりの病葉数 0枚 (平年0.03枚) : やや少 (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 8～9月の秋芽生育期に降雨や多湿条件が続くと、越夏病葉が伝染源となり多発するので注意する。
- (イ) 本病の感染は新葉に限られ、感染から病徴がみられるまで2か月以上を要する。
- (ウ) 炭疽病との同時防除が可能である。
- (エ) 平坦地においても「やぶきた」、「あさのか」等の本病に弱い品種は発生に注意する。

(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	やや少
	チャハマキ	並
(ウ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ	並
	チャハマキ	並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 (7月中旬)

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	少	やや少
発生ほ場率	4% (平年 13%) : 低い (-)	2% (平年 8%) : やや低い (-)
虫数 (1㎡当たり)	0.2頭 (平年 0.6頭) : やや少 (-)	0.03頭 (平年 0.3頭) : やや少 (-)
【定点調査】 (フェロモン)		
第1世代誘殺数	530頭 (平年 780.9頭) : やや少 (-)	1,197頭 (平年 432.5頭) : 多 (+)
第1世代の50%誘殺日	6/15 (平年 6/16) : 並	6/13 (平年 6/13) : 並

(イ) 気象予報

降水量: 平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除を行う場合, 防除適期は発蛾最盛日の7~10日後 (ふ化~2齢期) である。

(イ) 近年, 秋期に発生が多い傾向にあるので, 今後の発生動向に注意する。

(ウ) 地域によっては, チャハマキのジアミド系薬剤に対する感受性が低下している事例もあることから, 薬剤の選定に当たっては地域の管理暦に準ずる。

(5) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土
(イ) 発生量	並
(ウ) 発生時期	並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量: やや少

発生ほ場率 11% (平年 18%)

: やや低い (-)

1㎡当たり巻葉数 0.4枚 (平年 1.0枚)

: やや少 (-)

定点ほ場における第2世代の誘殺数 (フェロモン) 2,703頭 (平年 2,422.2頭) : 並

定点ほ場における第2世代の50%誘殺日 6/29 (平年 6/27) : 並

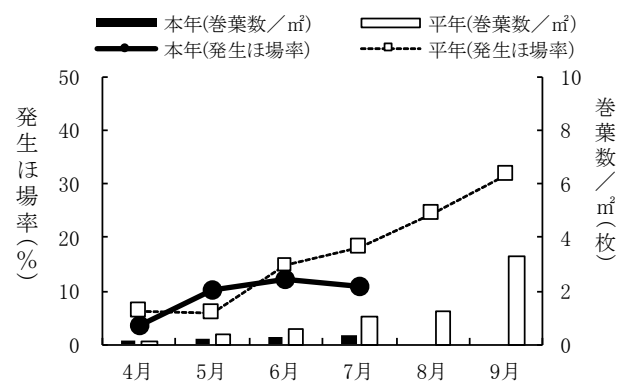
(イ) 気象予報

降水量: 平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので, 適期防除に努める。

(イ) 地域によっては, IGR系やジアミド系薬剤に対する感受性が低下している事例もあることから, 薬剤の選定に当たっては地域の管理暦に準ずる。



(6) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
 チャノキイロアザミウマ やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果(7月中旬)

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	並	少
発生ほ場率	43% (平年 40%) : 並	72% (平年 89%) : 低い (-)
虫数(4か所たたき落とし)	2.1頭(平年1.5頭) : やや多(+)	7.9頭(平年13.0頭) : やや少(-)
【定点調査】(無防除園)		
虫数(50回すくい取り・たたき落とし)	12頭(平年16.2頭) : 並	14頭(平年18.1頭) : 並

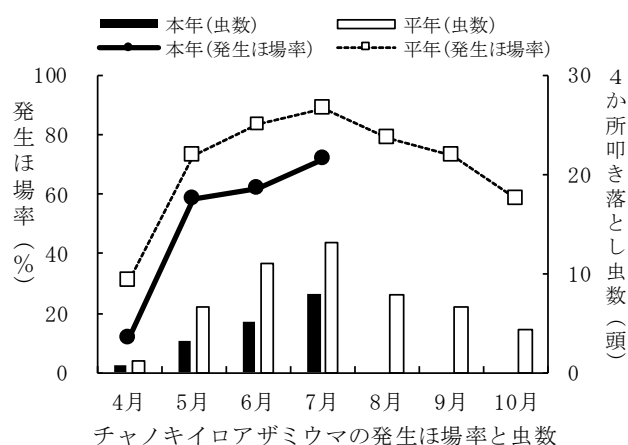
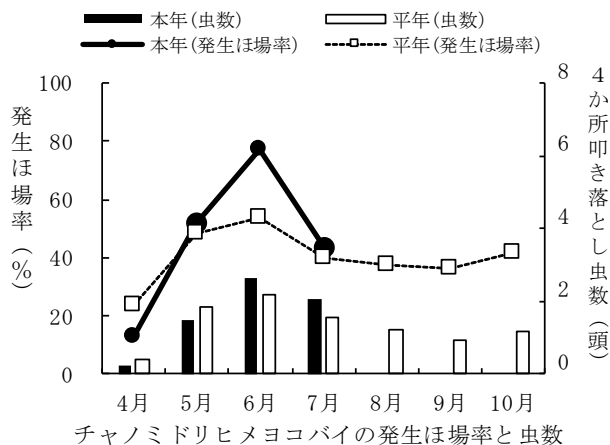
(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽での被害は，翌年の一番茶への影響が大きいので防除する。

(イ) 晴天が続くと多発する場合がありますので注意する。また，更新園や幼木園では，新芽の伸長期間が長いので被害が継続し樹体への影響が大きい。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年○○）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年○○）と表記する。